

「明石の君」装束の再現と展示 ―次の研究ブランディング事業のために―

佐藤 悟

「源氏物語研究の学際的・国際的拠点形成」が二〇一八年度文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」に採択され、実践女子大学のブランディング事業が始まった。私立大学研究ブランディング事業は少子化により私立大学の存亡の時代を迎えるにあたり、それぞれの大学が生き残るために特色ある研究・教育を行うことを目的としている。研究ブランディングとはそれぞれの研究領域で他を寄せ付けない圧倒的な地位を大学が獲得することを目標とする。さらに研究成果を教育に還元して、カリキュラム化できることが望ましい。しかし実践女子大学内では未だに研究ブランディングは広報活動と誤解されることが多く、担当した我々としては残念である。

実践女子大学の『源氏物語』研究は山岸徳平、阿部秋生、野村精一という『源氏物語』の碩学が教壇に立ち、多くの資料を収集し、その研究環境は他大学と互角以上の評価を受けている。『源氏物語』が実践女子大学の研究ブランディングの対象として最適であることは疑いがなかった。近世文学を専門とする筆者が文部科学省に提出する調査の構想を大学から任されたのは、外部資金獲得の調査の執筆に馴れているという理由だけだった。二〇一七年度採択に向けて

選択と集中を意識しながら横井孝教授と作成した調査は、オール実践で源氏物語にかかわる事業を行うという調査に
改変され、結果は不採択であった。二〇一八年度は二〇一七年度の原案とほぼ同じ内容で応募し、採択されたものの、
事業期間が五年から三年に短縮された。大学は採択を予期していなかったもので、準備は何も行われていなかった。こ
れが我々の個人的な研究、あるいは「名誉」（名聞か）のための研究という大学内の一部の認識を生む遠因となった。『源
氏物語』を専門とする横井教授の退職もあり、専門外の筆者がプロジェクトリーダーに指名された。

研究ブランディング事業として採択されるためには新規性が必要であり、従来の『源氏物語』研究とは一線を劃す必
要があった。そのため研究ブランディングは次の二つを柱としていた。

一、高精度デジタル顕微鏡による『源氏物語』写本を非破壊で光学的に分析することにより、料紙の性質を判断し、
『源氏物語』の鎌倉期の本文を再建する。さらに写本の作られた社会的、政治的、経済的背景にアプローチする。

二、『源氏物語』若菜 下「六条院の女樂に登場する明石の君の装束を再現し、装束の立場から『源氏物語』及び『源
氏物語絵巻』の新しい解釈を目指すとともに、研究ブランディング事業のシンボルとする。

一はこれまでに三回のシンポジウムを開催し、その成果の一部は『書物学 第一九巻 紙のレンズから見た古典籍』
(勉誠出版、二〇二二年)、江南和幸・佐藤悟・横井孝(新コディロジー研究会)編『紙のレンズがひらく古典籍・絵
画の世界』(勉誠社、二〇二三年)として世に問うことができた。

装束については二〇二三年十二月一日より二十八日にかけて丸紅ギャラリーにおいて「源氏物語 よみがえった女
房装束の美」として公開することができた。実質二十四日間の会期中に一万六千五百三十人の方に御覧いただき、図
録も完売し、会期終了後に三刷目が印刷されるといふ異例のご評価を頂戴した。

この展覧会に至るまでには多くの方のご尽力、ご厚意を賜り、それらがなかったら今回の展示には至らなかったの

で、これまでの概略について振り返ってみたい。

展覧会が丸紅ギャラリーで開催される契機となったのは、本号の丸紅ギャラリー館長杉浦勉氏の玉稿にもあるように、二〇一八年に本学主催で実施したパリ日本文化会館の香道二十三世御宗家三條西堯水氏と小畑洋子氏、衣紋道高倉流二十六世御宗家高倉永佳氏や永井とも子氏による講演と実演であった。この時は多くの高倉流の先生方にご助力を願ひ、日本香堂ホールディングス社長小仲正克氏や社員の皆さんのご尽力も忘れることができない。香道研究部、礼法研究部の学生諸君にも多大のご助力を頂戴したが、学生の海外研修という位置付けにされ、多くのご負担を掛けられたことが今でも心苦しい。パリ公演が目指したものは実践女子大学の『源氏物語』の研究水準を視覚的にパリにおいて示すことであつた。公演そのものは好評であつたが、構想はコロナ禍もあつて未だに実現に至らないのが残念である。

女房装束の再現にあつて、製作は株式会社井筒の井筒與兵衛氏に、染色は染司よしおかの六代目吉岡更紗氏にお願いすることを決め、実際の装束の製作が始まつた。ところが最初の障害が起きて、装束の再現は頓挫することとなつた。『源氏物語』が筆者の専門外であることはすでに述べたが、驚いたのが平安期の女房装束の遺品が一点もなく、有職書も院政期以降のものしかなく、大部分が男性装束に関するものであつて、女房装束に対する研究の蓄積が極めて薄いということであつた。そのため基礎研究を行う必要が生じ、最初に高倉氏による現代装束の製作を行ない、現代の女房装束の構造や着装手順を確認する作業をおこなつた。これにより現代装束と柔装束を比較する視点を持つことができた。

コロナ禍の下でもあり、会合が不自由な状況であつたが、ZOOMによる研究会をほぼ毎週土曜日に行った。研究会には実践側から高倉氏、永井氏、横井氏、本学卒業生の大井三代子氏が参加、株式会社井筒からは井筒氏、および本号にご寄稿いただいた井上仁美氏、落里美氏が、他に杉浦勉氏にご参加いただいた。「大胆かつ斬新な研究」が合い

言葉であった。他に実践側だけで夜分に随時研究会を実施した。さらにコロナ禍が収束に向かうと本学卒業生の古川陽子氏をモデルに寸法等の実験を繰り返して、形状、寸法等を決定した。古川氏には撮影のモデルも勤めていただき、その体験を本号に執筆していただいている。また『源氏物語絵巻』が五島美術館と徳川美術館において全点公開されるという幸運もあり、実物によって女房装束を検討することができたのも有意義であった。結論から言えば、現代装束とは大きく異なるものとなった。

これらの研究・実験を通じて再現した装束は身頃(袴)と袖が一体となった縫腋として製作することとなった。また裳の研究から、女房装束は紐や帯を用いず、重ねて着ているだけだということに驚かされた。また井筒は重桂を二十枚製作し、落氏が着装実験をおこなった。装束が左右対称であったかなどの疑問が解決されないままであったし、装束の縮みを計算に入れないなどの失敗もあった。装束の織についても井筒氏や橋野広和氏から多くの御示教を賜った。二階織物(二重織物)の製作に当たっては現代とは異なる技法を再現して製作した。染色も吉岡氏が我々の細かな要求に良く応えてくださった。今回、井筒氏と吉岡氏から賜った織と染色に関する資料は次の装束再現の貴重な資料となるであろう。

二〇二一年から杉浦館長との間で丸紅ギャラリーにおける展示についての協議が進んでいたが、二〇二二年二月に突然大学から展覧会中止の指示があり、杉浦館長のご厚意で丸紅ギャラリー単独主催の方向で展覧会実現への検討が続けられた。

大学は我々とは別に東京オリンピック関連事業として文化庁の補助金による独自の源氏物語展覧会を予定していた。その構想は「大衆に源氏物語を啓蒙する」というコンセプトに基づくものであった。社会の『源氏物語』という知への渴望に応えようとする大学の姿勢は理解できたが、新しい領域に挑戦し、新しい価値を創造するという研究プラン

ディングとは相容れないコンセプトであった。ただ、この展覧会は予算規模が大きく、理事会の承認するところとはならず、文化庁の補助金も決定していたので、低予算で大学の研究レベルを示す『源氏物語』の展覧会を我々が実施することとなった。準備不足ではあったが、丸紅ギャラリーでの展示を見据えながら、七月に現代装束を中心とした展示や講演、着装や香の体験を行った。この際、大学からは再現した装束の一部展示を求められたが、丸紅ギャラリーにおける展示に支障をきたすのでお断りするなど、コンセプトの違いが大きな摩擦を生んだ。この摩擦は後々まで我々を苦しめるものとなった。展覧会は好評のうちを終了し、低学年の小学生児童も満足するものとなった。日本香道が工場のラインを止めてまで『源氏物語』に登場する香の再現に協力してくださったことを特筆しておきたい。

この展示が外部的に評価を受けたことが、次のJ Vキャンパスへと繋がって行った。J Vキャンパスは文部科学省が大学授業の海外発信を行うための、使用言語を英語とするプラットフォームであった。十二月に募集があり、大学からの要望で、応募して採択された。内容は現代の装束・再現装束・装束の歴史という三本のビデオから構成され、高倉氏が中心となって撮影を進めた。ビデオの納品は八月末が期日とされていた。丸紅ギャラリーの収録の締切りと重なって多忙を極めたが、この成果が収録に反映され、装束の伝統と美しさを世界に伝えることができたのは大きな喜びであった。またJ Vキャンパスと丸紅ギャラリーにおける展示に対する実践女子大学研究推進室の高橋渉部長と佐藤雅史課長補佐の献身も忘れることができない。

この間、二月十一日・十二日に京都産業大学で「古典の再生」というシンポジウムが開催され、筆者が「女房装束の変遷―平安期女房装束の復元を通じて―」という発表を行った。このシンポジウムでは我々の仕事も、復元なのか、再生なのか、再現なのかという問題が提起された。その結果が丸紅ギャラリーにおける展覧会タイトルへと繋がっていった。

丸紅ギャラリーにおける展示方法は再現した女房装束それぞれを衣桁にかけて展示するという従来の方法ではなく、高倉氏の発案で着装した状態で展示した。各地の観光施設に見られる十二単の展示と同じような展示になることを筆者は危惧したが、平安期の色の美しさを見事に再現するものとなった。展示にあたっては古川氏が着装した状態でケース内に移動し、立体的な展示を行うという方法を採用した。

この展覧会は杉浦館長のご厚意と丸紅本社、丸紅ギャラリーの皆様の全面的なご支援がなければ実現が不可能であり、重ね重ね御礼を申し上げたい。

本号における女房装束の小特集は中間報告である。きちんとした報告書を刊行することが我々の責務であろう。研究ブランディング事業は大学として継続しなければならないことは自明である。我々の失敗は多岐にわたるが、最大の失敗は大学内でのコンセプトを共有できなかったことである。展覧会はNHKの日曜美術館アートシーンなどで紹介されたこともあり、多くの方にご観覧いただくことができた。研究ブランディング事業の社会への還元ということは重要ではあるが、本質ではない。研究領域で他を寄せ付けない圧倒的な地位を築くという当初の目標を達成できたかという点についてはまだ不十分である。愛知製鋼、ダイハツ、豊田自動織機などの品質管理に関する欠陥がニュースとなっている。研究の品質管理も同様に重要である。はたして今回の研究ブランディングでそれができていたのだろうか。今後の個々の研究計画はあっても、この研究ブランディング事業の後継計画はない。必然の結果とも言える。骸骨を乞う時が来たようである。次の研究チームができた時には、我々の達成できなかった目標に到達することを願っている。そのための参考になるやとこの一文を認めた。後事を託したいと思う。

(本学国文学科教授・文芸資料研究所所長)